

## モモせん孔細菌病

### 発生生態

#### 病徴

葉、果実、枝に発生する。

枝では、開花期から落花期にかけて、紫褐色～紫黒色の楕円状～不整形の病斑を生じ、やがてカサブタ状になる。これを春型枝病斑（スプリング・キャンカー）とよぶ（写真1）。

葉では初め淡緑色～黄緑色、多角形、カスリ状の斑点があらわれる。病斑は、褐色から灰褐色に変わりながら拡大し、病斑の周囲は褐色となる（写真2）。後に、病斑部は枯死し、健全部との境に離層ができ、脱落してせん孔症状となる。発病が甚だしい場合には落葉する。

新梢には、6月～8月に同じような病斑を生じ、これを夏型枝病斑（サマー・キャンカー）とよぶ。

果実では、初めは褐色の小斑点を生じるが、後に拡大して、黒褐色不整形の果肉にくいこんだ病斑になる（写真3、4）。



写真1 枝での発生（春型枝病斑）



写真2 葉での発生



写真3 果実（幼果）での発生



写真4 果実（収穫期頃）での発生

### 伝染経路

病原細菌は、前年秋期に新梢の落葉痕や皮目から組織内に潜入・越冬し、翌年の春になると春型枝病斑をつくる。ここで繁殖した病原細菌は、雨滴に混じって周囲に分散し、葉や果実に伝染する。

### 発生を助長する条件

病原細菌は10℃～35℃で生育するが、適温は25℃前後で、葉や果実の気孔や傷口から侵入する。風当たりの強い園地や多湿条件の園地で発病が多くなる。特に、台風の通過後には発病増加が著しい。

### **防除のポイント**

- ・春型枝病斑等の発病部位をせん除し、病原細菌の密度を低下させる。
- ・秋季防除を行い、越冬菌密度を低下させる。
- ・常発地帯では、防風ネットや防風林を設置し、風当たりを弱める。
- ・果実被害が多い場合は、袋かけを行う。

### **参考文献**

- (1) ひと目でわかる果樹の病虫害－第三巻－／社団法人 日本植物防疫協会

### **写真提供**

- (1) 福島県農業総合センター果樹研究所